

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	英 美由紀【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成23年3月単位修得退学)	要 旨
論文題目	Subversive Potential of the Body: Representations of Cosmetic Surgery in Contemporary Anglo-American and Japanese Literary and Visual Texts	<p>本論文は 1970 年代以降のアングロアメリカと日本の文学および視覚テキストにみられる、各種美容行為の表象について、その歴史的、文化的、理論的な意味生成を、現代社会におけるジェンダー関係や同規範との関係において考察した英語による論考である。</p> <p>4 部からなる論文の第 1 部では、医療行為・美容行為としての美容外科の成立・発展をめぐる医療文化史を概観し、第二波フェミニズム期に女性の身体美や各種医療行為が社会のジェンダー関係や規範への順応として批判された後、1990 年代以降、こうした行為が抵抗や攪乱の可能性をもつとする理論パラダイムのシフトを経て、さらには男／女、有機／人工物、自／他といった対立概念を解体する契機としての可能性が模索される現在の状況を、「エイジェンシー」、「選択」等の概念、「人種」「怪物」といった争点を検証しつつ、それをふまえて理論と具体的な表象間の呼応を検討するための論理構成を提示する。</p> <p>第 2 部から第 4 部は具体的な作品の検証で、第 2 部では、1970 年代から 1980 年代の英米の表象作品の分析を通して、女性身体の客体化、病理化により「無力な犠牲者」として表象される女性像や、美容行為を「エンパワーメント」の手段として「選択」する女性像から最終的に既存の異性愛秩序に再回収されることになる美の政治性を論じ、第 3 部では、1990 年代から 2000 年代に展開した美容行為の質および量の変化と若年層への広がりや、ヤングアダルト小説に見られる美容行為の表象から分析し、それらが従来のジェンダー規範を再生産する一方で、従来の「美」を反復することなく、「サイボーグ」や「怪物」等、ジェンダー、美醜、ヒト／動物、自他といった境界解体の可能性をもつ身体を提示することに着目、主体概念やテキストの混交性の議論へと接続して分析する。第 4 部では、ジェンダーの分析軸に人種を加え、有色人種への施術 (Ethnic Cosmetic Surgery) がもつ潜在的な権力関係を明らかにする。</p> <p>以上から、本論文は、これまで主に社会学的な見地から検討されてきた現実社会の身体加工や美容行為の解釈を、先行研究をふまえつつ、表象文化論として創造的なテキストの次元に開いて体系化を試みた論考となっている。</p>
審査委員	(主査) 教授 戸 谷 陽 子	
	教授 松 崎 毅	
	准教授 清 水 徹 郎	
	教授 天 野 知 香	
	教授 館 かおる	